

中国歴	南北朝	隋	唐	五代	北宋	南宋	元	明	1200		1400		1600		1700		1800		明治	大正	昭和	平成	
	581	618		907	960	1127	1260	1368															
和歴	大和	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	南北朝	室町	戦国	安土桃山	江戸		明治		大正		昭和		平成					
	593	710	794		1192	1338	1392	1467	1574	1603								1868		1912	1926	1989	
				弘仁 810	承和 834		応永 1395	永享 1429	応仁 1467	文明 1469	長享 1487	弘治 1555	永録 1558	天正 1573~1592	慶長 1596~	寛永 1624~1644							

茶の湯の成立する以前

室町時代『花伝書』
立花には真行草の体
花瓶は「立てる」
船には「なげ入」
棗籠は「いるる」

『君台観左右帳記』
唐物花入れ（古銅、青磁）
は真の花入れ
「飴かざり次第」
大から小、一対の花瓶など、
器形は明らかでない
東山御物の中から茶の湯に
ふさわしい寸法、作行

侘茶風への変化

桃山時代和物花入が流行
しかし主流は古銅、青磁

花入は用を第一とする器
でなく床にあって格を象徴

特に天正16年
茶道具の変化期
花入古銅や青磁使用頻度
は減少

『天王寺会記』
永録元年1558
すべて古銅か青磁
2年後、籠が加わる

永録10年1567
利休の会に「備前物」
（和物の花入）が茶会記
で初めて見られる

永録12年1569
花入を掛けて用いている
「置」から「掛」花入へ

天正15年1587
備前と信楽が頻りに使われる

天正18年1590
『天王寺会記』に、桑山
修理の会に竹の花入登場

茶碗

天正14年 宋易形ノ茶碗
唐物茶碗から高麗物、和物
が主流
「山上宋二記」唐茶ワン
ハ捨リタル

水指

初めは手桶が主流
天正14年 釣瓶つるべ
天正15年 備前、信楽
天正17年 瀬戸が加わる

江戸期茶風の変化

江戸時代幕藩体制のもと
で再び伝来の古銅、青磁
が取り上げられる
古備前→伊部手
伊賀→形式的な器になる
装飾性が好まれる
美濃窯の織部焼き
室みよし、絵付、釉技で
装飾

花入は唐もの主流にもどる
「君台観左右帳記」をもとに
座敷飾りを行う大名の徳川幕藩
体制での傾向
茶入に次格式の道具高取砂張船
花入
仁清の下無花入新しい唐物
景德鎮窯の古染付主に武家茶人
に好まれる

現代の花入の扱い

花入は格が重視
床の掛物によって選ばれる
場合が多い
高僧の墨蹟には、青磁や唐銅
季節の掛物や消息は竹、籠、焼締陶

使用の約束事

畳床に据える時の薄板
青磁、古銅 —— 矢筈やはず板 真
釉の和物陶磁器 — 蛤はまぐり板 行
焼締め陶 —— 木地板 草
籠 —— なし
籠
和物 —— 風炉の季節のみ（水を含ませる）
唐物 —— 季節を問わない（水は打たない）

古銅、唐銅（砂張）



古銅龍耳 古銅鶴首 青磁筍 重文 青磁筒



古銅砧形 杵のをれ 古銅立鼓 よなか



古銅大魯呂利 砂張船 針屋船 青磁中蕪 吉野山

古銅の花入

「君台観左右帳記」の「胡銅之物」にこれは高い位の物で公方様の名物と同様とある
16C初頭には精緻な写しが日本できている
唐物か和物かの区別は難しい

唐物その他



天目釉 宋元時代 唐物南京玉入籠

青磁



青磁鳳凰耳 青磁不遊琵琶鏡



青磁中蕪 吉野山



青磁大魯呂利

備前花入

13C頃かめや壺、すり鉢など日用品の焼物
早くから釉を用いる瀬戸窯に対し一貫して焼締め
室町時代に良質の土をもって唐もの写し
村田珠光の時代に、備前、信楽の日常品が見立てられる
いちちはやく茶陶生産に踏み切る
当初矢筈口形式（筒形）を基本とし口部に変化を

その他



瓢 顔回 利休作 木惣 金森宋和作

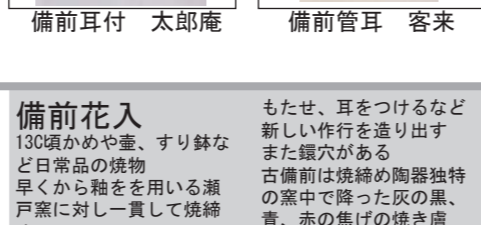
焼締め陶



備前筒 北むき 北向道陳（利休の師） 備前三角



備前耳付 太郎庵 備前管耳 客来



伊賀花入 伊賀耳付

伊賀花入

備前にやや遅れて造られ桃山時代を代表する茶会記に初見されるのは遅い寛永年間1624~1644古銅の花入素形、銀付の穴がある
この時代の和陶花入は壁、柱に掛けることを前提に造られる
床飾りの意識が変ったといえる天正15年頃

信楽花入



信楽花入 信楽蹲

瀬戸花入

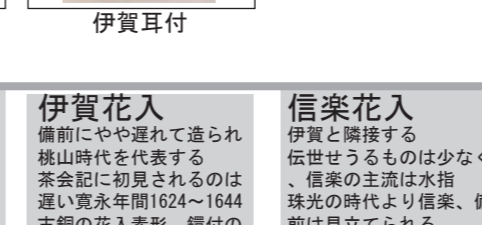


瀬戸雁口

瀬戸花入

焼締め陶に對して施釉陶には、唐もの写しが見られる
伊部手（桃山末期~江戸初期に大量に焼かれた）も写しが見られる
唐もの花入に対する意識が脈々と続いた

古染付



古染付高砂

籠花入

弘治2年1556「天王寺会記」に登場。唐物と推測
慶長14年1609「松屋会記」頻りに使われる。おそらく和物の新しい籠花入
江戸時代は精巧な唐物写し
江戸前期は季節を問わず炉の季節も使われている
籠は立花の草体として早くからある利休は見立て、江戸時代は茶人の好みで積極的に作られる

竹花入



竹尺八 利休作 竹二重切 利休作 竹輪無二重切 再来 遠州作 竹一重切 金森宋和作 竹一重切 片桐石州 竹置筒 遅馬 藤村庸軒 竹置筒 白菊 藤村庸軒

釉の和物陶磁器



瀬戸立鼓 旅枕 重文 古銅無無かぶらなし花入を造った形 志野掛



瀬戸雁口

朝鮮唐津

朝鮮唐津

楽道入作

緑釉鶴首 楽道入作 楽家三代目 のんこうと呼ばれる

籠



籠 利休所持 手付籠 久田宋全作

籠



籠 利休所持



手付籠 久田宋全作

籠花入

弘治2年1556「天王寺会記」に登場。唐物と推測
慶長14年1609「松屋会記」頻りに使われる。おそらく和物の新しい籠花入
江戸時代は精巧な唐物写し
江戸前期は季節を問わず炉の季節も使われている
籠は立花の草体として早くからある利休は見立て、江戸時代は茶人の好みで積極的に作られる

古染付

古染付高砂

竹花入

通説は利休が秀吉の小田原出陣（天正18年）に同道したおり山の竹で「園城寺おんじょうじ」「尺八」「夜長」の三つを作ったのが始まりと言われる江戸時代の特色として利休の侘茶をくむ世界において竹花入が重視
千家
遠州宋和 堂々と優美な作を好む
石州 侘た趣を好む
庸軒 作や銘に趣向を凝らす
茶杓と同質の物と化す

竹尺八 利休作 竹二重切 利休作 竹輪無二重切 再来 遠州作 竹一重切 金森宋和作 竹一重切 片桐石州 竹置筒 遅馬 藤村庸軒 竹置筒 白菊 藤村庸軒